

立命電友会

立命電友会

設立総会開催

平成四年十一月一日（日）立命館大学全学の期待を一身に集めて、立命電友会設立総会が、京都全日空ホテルにて開催された。

本会の設立は卒業生ならびに教職員との長年の悲願であった。本会の設立及び本総会の企画・運営は、まず意を決して御参集頂いた学内外のOB及び関係者諸氏による準備委員会の結成に始まり、その主旨に御賛同頂いた卒業生の熱い期待に支えられ、数々の難関を乗り越え、ようやくの開催の運びとなった。しかし、OB諸氏ならびに大学関連のネットワークにより、大会当日にはホテルのフロアを埋め尽くさんばかりの校友が集い、大会関係者のそれまでの苦勞をすっかり拭い去るものとなり、出席者の皆様方とともに立命館で学んだ

誇りを強く感じるものであった。

当日は、母校より、大南正瑛総長をはじめとする諸機関部課長、また、御退官された歴代の諸先生方、さらに、その他数々の校友会組織の代表の方々の御臨席を賜り、校友約六〇〇名にも及ぶ出席者のもとで設立総会は厳粛かつ盛大に行われた。

総会は、まず杉本末雄準備委員会委員による開会宣言に始まり、島津良昭氏を議長に選出の後、得田益男準備委員会委員長による挨拶が行われた。続いて来賓の大南正瑛立命館大学総長ならびに島田泰男機友会会長より御祝辞を賜った。そして辻村寛副委員長から本会設立に至る経過報告があり、中島一郎副委員長により本会の名称を「立命電友会」とする名称決議

が行われ、続いて中西恒彦準備委員会事務局長により会則の提案がなされ満場一致で承認された。更に、本会の初代会長として得田益男氏（昭和二十年卒）が出席した校友の総意を持つて選出され、初の挨拶が行われた。その後、本会設立以前より活発な活動を行っている大阪立電会の足立宜久氏（昭二十八年卒）ならびに関東立電会の兼田豊彦氏（昭二十四年卒）よりその活動報告があった。そして本会の決算見込みの報告が津田川勝準備委員会会計監事により行われ、最後に電気電子工学科三木秀二郎主任により閉会の挨拶が述べられた。

立命電友会設立総会



総会終了後の懇親会では、辻村寛副委員長の開宴の辞に引き続き、来賓の大野豊理工学部部長ならびに川本八郎立命館大学専務理事より御祝辞を賜った。そして当日の最年長出席者である小島常雄氏（昭十六年卒）の乾杯の音頭により祝宴が始まった。各種のアトラクションが行われる中で、御婦人または御家族同伴で参加された校友も数多く見られ、会場は和気あいあいのなかにも溢れんばかりの活気を呈した。最初は卒業年度ごとに談笑していた人の輪が時間とともに広がり、卒業年度を越えた校友同志としての連帯感を確めあう雰囲気が随所にかもし出された。そんななか田中道七寄付委員会事務局長より理工学部の大壮な二十一世紀事業計画の報告があり、卒

業生としての協力要請がなされた。最後に得田益男新会長より副会長、監事の披露が行われ、参加者全員で校歌及び応援歌を斉唱し、苅屋公明準備委員会副委員長による挨拶により閉会となった。互いの手を取りながら再会を約束し合う参加者の顔には満悦の笑みが溢れていた。今回の総会は四年後に開催されることとなった。



立命電友会設立

会長 得田 益男 (昭二十年卒)

去る十一月一日(日)京都全日空ホテルに於いて、校友五百余名の御参加を頂き、大南総長先生を始め多数の御来賓をお迎えして、電友会設立総会が開かれました。

電気工学科全卒業生が、長年待ち望まれた事だけに出席者の感激も大きく、厳肅な総会場もその喜びに満ち溢れておりました。無事総会終了後、出席者全員の懇親会が開かれました。師弟・同期・先輩の歓談の輪が自ずと会場一杯に広がり、楽しい一時をお過ごし頂き、最後に校歌等合唱して名残惜しくも散会いたしました。

かくも盛大に設立総会を遂行し得た事は、一年有余に及ぶ準備委員会の行き届いた打ち合せと御配慮の結果であり、更めて電気電子工学教室の先生方の御指導御尽力と年度幹事の御協力に対し、心より感謝申し上げますと共に御同慶に存ずる次第です。

さて、総会の席上、私は初代会長の御指名を受けましたが、浅学非才にて誠に身の引き締まる思いであります。

全会員の暖かな友情を信じ、全役員の御協力を得て会則に従い任務を遂行する所存です。関係各位の御指導と御鞭撻を心よりお願いいたします。

最後になりましたが、電友会は会則により会員の終身会費によって維持されていきます。未納入の方々は、至急納金頂きますようお願い申し上げます。



役員会結成会議開催

立命電友会設立総会を受け、その準備委員会の解散と役員会結成の会合が平成四年十一月二十八日(土)午後二時半より、からすま京都ホテルにて開催された。

まず設立総会の事業報告が行われた。厳重な監査を受けた決算は黒字となり、立命電友会会計に繰り入れられることとなった。続いて現在までの終身会費の納入状況についての報告があり、未納者に対する活動方法等についての意見交換がなされた。そしてここで準備委員会の解散宣言に引き続いて役員会のメンバーが選出され、下記のとおり決定した。次に「立命電友会会誌」の配布状況についての報告があり、今後とも終身会費納入者には配布する予定である事が述べられた。そして今後の事業計画として会報の発行、卒業祝賀会、電気電子フォーラムの開催、財政計画などの提案がなされた。また電友会の嘱託職員として前田稔夫氏(昭三十年卒)が選出された。

会議後には、準備委員会の慰労を兼ねた役員会結成懇親会が催され、事業計画等に対する各自の抱負を述べ合いながら、夕刻に会合を終えた。

役員紹介

会長

得田益男(昭二十年卒)

副会長

辻村 寛(昭二十八年卒・教員)

中島一郎(昭三十一年卒)

苅屋公明(昭三十二年卒・教員)

会計監査

前田稔夫(昭三十年卒)

栗路真博(昭三十四年卒)

事業幹事

島津英誓(昭四十一年卒)

中西恒彦(昭四十一年卒・教員)

津田川勝(昭四十四年卒・教員)

天野佳則(昭四十六年卒)

島田義一(昭五十一年卒)

高山 茂(昭五十九年卒・教員)

委員

砂崎道夫(昭二十年卒)

辻 正博(昭二十四年卒)

木村豊茂(昭二十六年卒)

竹口良門(昭二十六年卒)

和田正義(昭二十六年卒)

小山仁平(昭二十七年卒)

石井 實(昭二十九年卒)

加納久雄(昭三十年卒)

樋口昌利(昭三十年卒)

藤岡孝造(昭三十年卒)

中西一夫(昭三十一年卒)

西村明男(昭三十一年卒)

小松 明(昭三十二年卒)

池田育弘(昭三十二年卒)

植村義彦(昭三十二年卒)

澤田謙造(昭三十二年卒)

松井新三(昭三十二年卒)

富森昭博(昭三十三年卒)

岩本保雄(昭三十四年卒)

橋本武久(昭三十五年卒)

島津良昭(昭三十五年卒)

山川貞太(昭三十六年卒)

鈴木良一(昭三十七年卒)

秋山憲成(昭三十八年卒)

南 能寿(昭四十二年卒)

瀬見英利(昭四十四年卒)

津田見真(昭四十四年卒)

石井英敏(昭四十五年卒)

高杉雅昭(昭四十六年卒)

正田純一(昭四十六年卒)

稲田耕史(昭五十一年卒)

吉松 繁(昭五十四年卒)

久保村浩(昭五十九年卒)

本庄謙一(平元年卒)

委員(在職教員)

(卒業年順)

井上和夫(昭三十三年卒)

浦山 隆(昭三十三年卒)

岡田正勝

川畑隆夫

杉本末雄

三木秀二郎

溝尻 勲

荒木義彦(昭四十四年卒)

亀井且有(昭五十三年卒)

小松康廣 (職名別五十音順)

立命電友会会則

第一章 総則

第一条（名称）

本会は「立命電友会」と称する。

第二条（本部）

本会は本部を立命館大学理工学部電気電子工学科内に置く。

第三条（会員）

本会の会員は次の者よりなる。

一、以下に在籍したことのある人

私立電気工学講習所、立命館高等工科学校電気工学科、立命館日満高等工科学校電気工学科、立命館大学専門学部工学科電気工学科、立命館専門学校工学科電気科、立命館短期大学工科電気工学専攻、立命館大学一部理工学部電気工学科、立命館大学二部理工学部電気工学科、立命館大学大学院理工学研究科電気工学専攻、立命館大学理工学部電気電子工学科

二、前項の教員とその退職者

第四条（顧問）

本会は顧問を置くことができる。顧問は幹事会の議を経て会長が委嘱する。

第五条（目的）

本会は会員相互の親睦を計り、相互の社会的ネットワークを構築し、あわせて立命館学園と科学技術の発展に寄与することを目的とする。

第六条（事業）

本会は前条の目的を達成するために次の事業を行う。

一、原則として四年に一回の定時総会と臨時総会の開催

二、会員名簿の作成および会誌の発行

三、会合や講演会等の開催

四、その他前条の目的を達成するための事業

第二章 総会および役員会

第七条（組織）

本会は第五条の目的を達成するため、会長一名、副会長若干名、幹事若干名、会計監査二名の役

員を置き、総会、役員会を開催する。

第八条（役員会）

役員会は本会の審議および執行機関であり、会長、副会長、幹事により構成される。

第九条（選出）

会長は総会において選出する。副会長、幹事、会計監査は会員中より会長によって推薦される。会長、副会長、幹事、会計監査の任期は四年とし、再任は妨げない。

第十条（職務）

会長は会務を総括する。副会長は会長を補佐し、会長事故ある時はこれを代行する。幹事は庶務、会計、編集その他の会務を処理する。会計監査は会計を監査する。

第十一条（召集）

総会は第六条一項に基づき役員会の議を経て会長が召集する。役員会が必要あるとき会長がこれを召集する。

第十二条（議決）

総会、役員会の議決は出席者の過半数によって行う。

第三章 会計

第十三条（年度）

事業および会計年度は毎年四月一日に始まり、翌年三月三十一日に終わる。

第十四条（経費）

経費は会費、事業参加費、寄付その他の収入をもって充て、運用は役員会の決議に基づく。

第十五条（会費）

会費は終身会費一〇〇〇〇円とする。

第十六条（監査）

会計は年度毎に役員会の承認を受け、総会において報告されるものとする。

第四章 その他

第十七条（改正）

会則の改廃は総会において出席者の三分の二以上の賛成を要する。

第十八条（支部）

本会は支部を設置することができる。

一、支部の範疇および支部会員、支部役員、支部規約はこれを

本部に通知するものとする。

二、支部は本部と連絡を保ち、本部会務の進行を援助する。

付則

本会則は一九九二年十一月一日より施行する。

定年退職に当たって

山田壽夫

私が前任の京都大学から立命館大学の理工学部電気工学教室に迎えられたのは昭和四十六年（一九七一年）四月の事でした。

いわゆる大学紛争がようやく鎮静し大学に平穏が戻りつつあった頃です。つい先日のことのようにも思いますが、はや二十二年の歳月が流れました。着任する前二年間、非常勤講師として講義を担当しましたのであわせて二十四年間立命館大学の教壇に立ってきた事になります。着任した頃にはまだ木造の教室や講義室が残っていて、衣笠山の裾野の自然も名残を止めていました。多くの建物が林立するようになり整備の進んだ現在から振り返ると今昔の感慨があります。

電気工学教室も新四号館の完成に伴って、少し暗い感じのあった旧四号館から移転して面目を一新、一九九二年度からは電気電子工学科と学科名称が改められ、さらに来年度からのびわこ新キャンパスでの開校を控え、新たな飛躍に向かっての準備も着々整いつつある事は誠に喜ばしい事です。電気電子工学教室の更なる発展を期待します。

ます。

私のもとで卒業研究を行って巣立った卒業生は二八四名を数えますが、夫々に各方面に於いて活躍中である事を大層嬉しく思っています。思い返してみると毎年の卒業研究では年毎にそれぞれの学生諸君と楽しい時間を過ごす事が出来大変幸いでした。

また私の着任の翌年から長年に亘り研究室の運営、卒業研究の指導に於いて現津田川勝助教授に助手として大層協力をいただきました。深甚の謝意を表します。

また最後の二年間は先に定年退職された岡田武夫教授の研究室を私が引き継ぐ形となり、ここに於いて現小松康廣助教授にもやはり助手として同様の協力を得ました。あわせて感謝の意を表します。

諸事多端の折柄教室員諸氏の御健康と、また立命電友会諸氏の御多幸を祈ります。

定年退職に当たって

前田稔夫

初めて衣笠の地を訪れたのは戦後間もない頃で、衣笠山麓の松林を通り抜けたところに木造平屋の実験棟が並んだ理工学部学舎（当時は専門学校）があったのを覚えています。

ています。

一九五五年、卒業間近となっても就職難で悶々としていたときに、学科主任であった羽村二喜男先生からのお話があった理工学部電気工学科へ奉職することになりました。爾来、三十八年、私の半生を越える年月をこの衣笠学舎で過ごし、定年退職を迎えることとなりました。此の間、多くの教職員の方々、そして学生、院生諸君といろいろな場所でいろいろな形で接することができ、そこで教えられ、学ばせていただいた事に対し、深く感謝の意を表する次第です。また此の間、衣笠キャンパスは一拠点化の過程で大きく変貌し、往時を忍ぶ建物も新しい建物の陰に隠されてしまったり、或いは囲まれたりしてその存在を保っている程度となつてしまいました。それらの建物も理工学部がびわこ・くさつキャンパスへ移転した後はその役目を終えることだろうと思うと、一抹の寂しさと感慨が込み上げてまいります。

来年四月には新キャンパスで理工学部は開講となります。それと同時に三つの新設学科が発足し、研究センター構想も実現の運びとなるでしょう。今後の理工学部の発展を期待するとともにその行方を見守りたいと思います。

終身会費御納入のお願い

このたび立命電友会が設立され、大学・電気電子工学教室・校友皆様方相互の交流・親睦をはかるべくその活動を行って参ります。つきましては、本会の確固たる財政基盤に基づく安定した運営を維持・確保すべく、すべての校友皆様方には公平に終身会費をお納めいただきますようお願い申し上げます。新たに卒業する学生諸君には卒業当日までに御納入いただき、すでに御校友の皆様方には郵便振込での御納入をお願いいたしております。宜しく御協力のほどお願い申し上げます。

終身会費

壹萬円（立命電友会会則第十五条に基づく）

納入方法

同封の振込用紙に卒業年、御芳名、御住所、電話番号を明記の上、最寄りの郵便局にて終身会費を御振込下さい。

事務局に振込通知がありしだい領収書および立命電友会会誌（設立記念号）を御送付いたします。

御問合先

京都市北区等持院北町五六―一
立命館大学理工学部電気電子工学科内
立命電友会事務局

電話 〇七五―四六五―八二〇三
FAX 〇七五―四六五―八二三八
(中西、津田川、高山)

「びわこ・くさつキャンパス」の 開設（平成六年四月）と移転計画

本学は滋賀県草津市への第二キャンパスの設置とそこへの理工学部の拡充・移転を決定しました。この計画は、新たな教育・研究分野の創造、学生数規模の拡大（学部学生四千名、院生等を含めて五千名）、学部の組織改革にともなう学科新設等の必要性から企画されました。

キャンパス予定地（約三四畝）は、琵琶湖南東にあたる草津市野路町に位置します。この周辺は「びわこ文化公園都市」ゾーンの

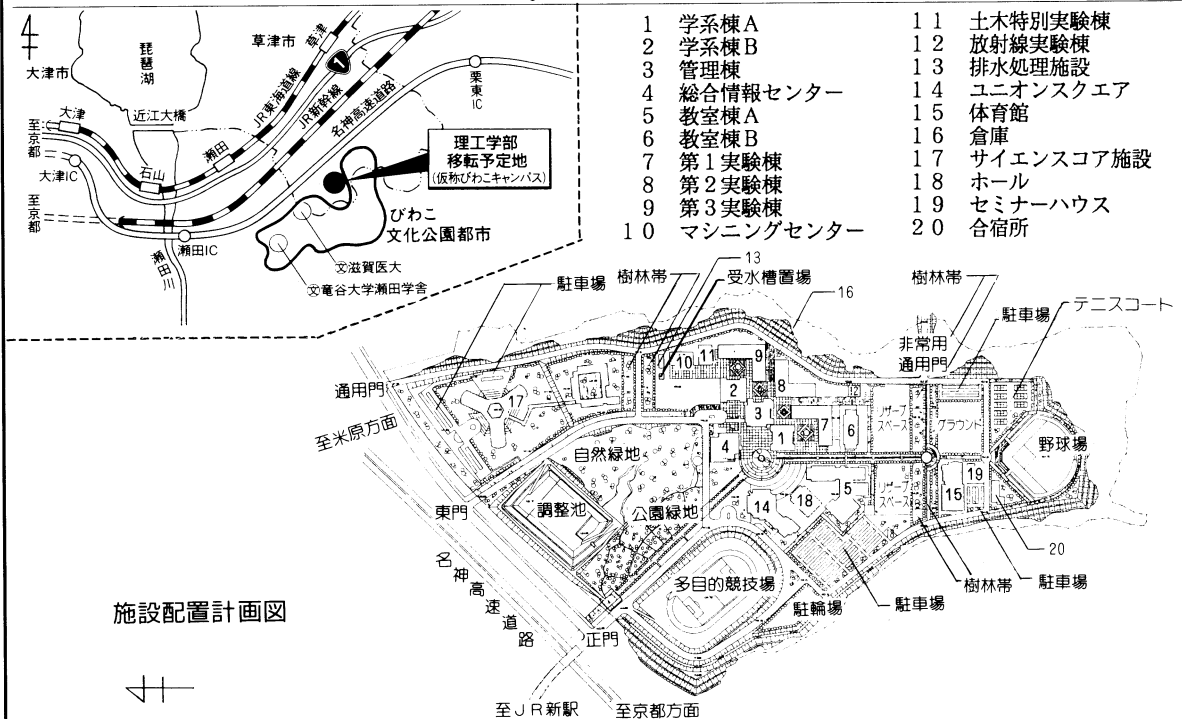
東端にあたり、滋賀県立図書館、滋賀県立近代美術館、埋蔵文化財研究センター等の文化的な公共施設や滋賀医科大学、竜谷大学瀬田キャンパス、滋賀県立東大津高校などの教育研究施設、そしてそのほか福祉関係の施設が整備され、緑を生かした県下最大の「文化ゾーン」となっています。また「びわこ・くさつキャンパス」は京滋バイパスを通じて京阪奈学研都市に結ばれ、JR琵琶湖線には瀬田駅―草津駅の中間に新駅が計画されています。この新駅からキャンパスまでは南へ約二キロのアク

セスとなり、すでにバス路線の整備が進められ、想定される京都駅からの所用時間は約三十分から四十分となっています。道路交通面では、キャンパスのすぐ北側を名神高速道路、京滋バイパス、国道一号線および幹線道路などが整備されており、更に計画中の第二名神高速道路と名神高速道路とのアクセス道路がキャンパス西側に予定され、周辺は近い将来交通の要所となるものと思われま

す。理工学部の拡充・移転事業は、環境や人間と調和したヒューマンティック・サイエンス・アンド・テクノロジーの発展をめざして取り組みが行われているものです。具体的には、現在の六学科構成から六学系九学科構成（「数学物理系（数学科、物理学科）、応用化学系（化学科、生物工学科）、電気電子系（電気工学科）、機械システム系（機械システム工学科）、建設環境系（土木工学科、環境システム学科）、情報系（情報学科）」に拡張・再編計画が進められています。また現在の理工学研究所を包括した「総合理工学研究機構」や「S

R光研究センター」の創設構想等が検討されております。

キャンパスには拡充移転後の理工学部の学生規模や大学院政策の展開、研究条件の整備、学生の課外活動を含めた総合的な観点から各種の施設が配置されています。学系棟には、教員の個人研究室、実験室、演習室や院生の研究スペースが収容されます。実験棟には、学系棟に収容できない広い面積を要する実験室や低回生の実験室、理工学研究所の実験室などが収容されます。管理棟には、教育・研究やキャンパス管理に関する事務機能と学部の行政施設が収容されます。総合情報センターは、図書館の機能に加え、視聴覚施設や情報機器をも備えた施設となります。教室棟には、小教室から大教室、更に教室機能として必要なその他の施設を収容します。ユニオンスクエアは、学生会館機能と厚生棟を合体させた学生生活の拠点となる施設で、食堂・購買・書籍部、自治活動・サークル活動施設、多目的ホールなどの他に、自主学習施設をも収容いたします。具体的な移転は学科ごとに順次行いますが、電気電子工学科は衣笠キャンパス再整備計画の関連で平成五年十二月頃の移転作業が予定されています。



電子技術研究センター設立へ

—産・官・学共同研究の

推進を目指す—

「びわこ・くさつキャンパス」での理工学部研究所の新しい構想として、自然科学の基礎的分野の研究を大学が独自に進める従来からの「理工学研究」の外に、社会的ニーズの高い先端科学技術分野を本学の教員や大学院生が民間企業や国、自治体と共同して進める「研究センター群」の二つを「総合理工学研究機構」のもとに置く構想が進められています。

—電子技術研究センターの分野—

本研究センターのスタッフは電気電子工学科所属の教員だけでなく広く学科の枠組みを越えた学内外の研究者によって組織されます。研究テーマについても研究の先端性と活性を維持するために、三〇五年毎に見直すことになりませんが、研究分野としては、(イ)光・電子デバイス分野、(ロ)画像情報処理分野、(ハ)制御変換・エネルギー利用分野とします。(イ)については、光機能素子、高速電子デバイスの開発を目標とし(ロ)に関しては、画像デバイスの開発、画像計測・信号解析、画像処理を、(ハ)については、高効率太陽光発電システム、大容量インバータシステムを当面の具体的テーマとして取り組む予定です。

現在、「ロボティクス・FA研究センター」、「電子技術研究センター」、「超高速計算・ソフトウェア研究センター」等の六分野についての設置が検討されています。「電子技術センター」については

—研究センターの組織運営—

「研究センター」は、社会的ネットワークを背景として設立されるという性格から、その研究成果を通して「先進的かつ高水準の研究を推進する大学」、「社会に開かれた大学」としての評価を高めることが期待されますが、また同時に大学院生の実践的な研究指導の場として機能することも当然です。研究スタッフとして本学の専任教員は兼務しますが、学外からの研究員受入れも積極的に進めます。大学院生の学位論文のテーマと関連する研究分野については、院生も研究スタッフとして参加することになります。

「研究センター」で実施する研究プロジェクトは、すべて学外資金によって実施されます。その形態は、企業との共同研究プロジェクトと大学単独で実施する寄付研究プロジェクトとなります。

—施設の概要—

現在構想している施設・設備の概要および所要資金は以下の通りです。半導体化合物等、電子デバイスの材料開発は「びわこ・くさつキャンパス」の電気・電子工学科の実験棟に用意されるクリーンルームで行いますが、他に電子技術

研究センター棟として延べ六百平方米を建設し、前述の各分野の研究設備を整えます。また、この施設は研究交流を推進する拠点となるもので、各分野で活動されている卒業生の利用を期待するものです。

この基本棟の建設総額は四億五千万円で、現在、京阪神の企業を中心に研究設備の現物寄付を含む募金への協力をお願いしています。

理工学部の拡充移転に

寄付金のご協力を

電気電子工学科教室

すでに卒業生の皆様には第四次長期計画事務局より寄付お願いの文書が届けられているかと思いますが、今回の事業の大部分が理工学部の拡充移転を内容とするだけに理工学部独自の取組みが要請されています。理工学部教授会では各学科毎に募金目標を決めて取り組むことを決議しています。電気電子工学教室では、昨年から「電子技術センター」の設立を掲げ、企業に対する協力要請を行ってきましたが、幸い、高い関心を寄せられ具体的な協力を頂ける企業も少なくはありません。しかし、

移転の総事業費は五百五十八億円にも上り、理工学部の募金目標を四十五億円と定めていますので目標達成も容易ではありません。電気電子工学教室では卒業生による募金目標を一億円とし、研究室単位で教員が協力依頼の訴えを行うことにしていますので宜しくご協力をお願いいたします。



電気電子工学教室だより

学科主任 杉本末雄

教員の異動

次のような異動がありました。
(定年退職)

山田壽夫教授
平成五年三月三十一日、定年退職。

前田稔夫助手
平成五年三月三十一日、定年退職。

(昇任)
中西恒彦
平成五年四月一日、電気電子工学科助教授より、同学科教授に昇任。

小松康廣
平成五年四月一日、電気電子工学科助手より、同学科助教授に昇任。

(新任)
川畑隆夫
平成五年四月一日、三菱電機㈱より、電気電子工学科教授に着任。

卒業記念祝賀会開催

平成五年三月二十日(土) 卒業式当日午後三時半より、平成四年

度卒業記念祝賀会(電気電子工学科主催、立命電友会後援)を末川記念会館第五会議室にて開催いたしました。卒業生、修了生、教員ならびに立命電友会会長を迎えて、約百三十余名の会合となりました。晴れて卒業・修了を迎えた学生諸君に對して、山田壽夫先生、前田稔夫先生そして得田益男電友会会長より、御祝辞をいただきました。

平成四年度電気電子工学科
卒業生進学就職状況

平成五年三月に卒業した学生の進学就職状況は別表の通りとなりました。平成四年度の求人数は、全国的な不況の影響を受けて例年に比べてかなり減少いたしました。そのため必ずしも第一希望の企業に採用されなかった卒業生も幾人かありました。本年度もできるだけ少数の大企業に集中しないように就職指導いたしました。その結果、就職者97名の就職先は67社になりました。博士前期課程への進学者は29名そして後期課程への進学者は1名でありました。本年度も多くの先輩卒業生の方々から就職の御依頼を受けましたが、十分御期待に沿えませんでした。心から御詫びと共に御礼申し上げます。

項 目		学 部	修 士	就職先
卒 業 者 数		109	19	
進 学 者 数		29	1	
家 業		1		
就 職 者 数		79	18	
会 社 ・ 官 公 庁	電力・ガス	5	1	関西電力、四国電力、中部電力、北陸電力、北海道電力、中国電力
	通 信	4		朝日放送、日本電信電話、読売テレビ放送
	鉄鋼・金属	2		住友金属工業、日本鋼管
	自 動 車	2	1	ダイハツ工業、マツダ、トヨタ自動車
	電 気 関 連	39	10	松下電器産業、日立製作所、ソニー、東芝、日本電気、ローム、三菱電機、シャープ、日本電装、関西日本電気、ケンウッド、三社電機製作所、三洋電機、住金制御エンジニアリング、T O A、日精コンピュータ、日本電産、日本ビクター、パイオニア、富士通、富士通テン、古河電工、古野電気、クボタ、井上電機製作所
	機 械 関 連 (一般・精密・輸送など)	13	3	村田製作所、アイシン精機、京都第一科学、島津製作所、鈴鹿富士ゼロックス、三田工業、豊田自動織機製作所、村田機械、カワタ、大日本スクリーン製造、近畿車両
	建 設	4	1	関電工、きんでん、住友電設、東光電気工事、日建設計
	ソフトウェア	3		日立西部ソフトウェア、日立ソフトウェアエンジニアリング、三菱電機マイコン機器ソフトウェア
	公 務 員	1		大阪府
	そ の 他	6	2	鐘紡、京阪セロファン、帝人、日本原子力発電、日本石油、野村総合研究所、富士写真フィルム、山本特許事務所

(順不同)

平成5年度電気電子

フォーラム六月に開催

平成5年度の電気電子フォーラムを六月十八日(金)、京都リサーチパーク(京都市下京区中堂寺十七)にて開催致します。今回は、現代の重点技術である電子デバイスに焦点を当て「二十一世紀への電子デバイスとその応用技術」と題して行われます。

昨年六月に学内で開催しました電気電子フォーラム(電気電子工学教室主催)は、各企業で働くOBをはじめとする多数の方々の御参加を頂き、大変に盛会でありました。今回は立命館大学理工学研究所および京都リサーチパークが産学交流の促進を目的として平成二年度から継続的に開催している技術フォーラムと合流し、双方の共催で、岡田正勝教授(電気電子工学科)を実行委員長として開催することに致しました。

講演者と演題は次の通りです。
川畑隆夫(立命館大学)

「新パワーデバイスの応用と技術動向」、
瀬見英利(東芝マイクロエレクトロニクス(株))

「カスタムLSIの現状と将来」、
新居宏壬(三菱電機(株))

「ディスプレイデバイスの現状と将来」、
岡田正勝(立命館大学)

「非線形光学デバイスの展望」、
石川容平(株)村田製作所)

「移動体通信用マイクロ波誘電体デバイスの技術動向と将来展開」、
浜川圭弘(大阪大学)

「マイクロエレクトロニクスからマクロエレクトロニクスへのエポルーション—電子デバイスにみる二十一世紀への流れと波」。

講演のあと親睦会を予定しております。皆様方の多数の御参加をお願い致します。本学理工学研究所(〇七五—四六五—八二四三)まで御問い合わせて下さい。

(幹事 津田川 勝)

同窓会だより

立電41会

電気工学科全体の校友会は長年の夢であり、この度の立命電友会の設立を共に喜びたいと思います。

さて、立電41会では毎年十一月の第一日曜日に同窓会を行っていただきます。今回は設立総会と重なりましたので、同じ全日空ホテルの「COZY」で昼食会を行い、引き続き設立総会に出席いたしました。参加者は二十名でした。では又一年後にお会い致しましょう。

苺屋研究室同窓会

(福田、島津記)

本会の事業目的の一つでありました「立命電友会の設立」がようやく実現し、その設立に携った一同窓会として、ひとしおの感があります。設立総会に御参加頂きました本会同窓の皆様方に厚くお礼申し上げます。

これで他学科同様に校友の皆様方への双方向の「窓」が置かれた訳ではありますが、この「窓」をいつまでも透明に保ち、その向こう側に見える物事を真摯に受けとめることが、これからの立命電友会の課題であろうかと思われま

さて、三年ごとに定例の同窓会を本年八月二十一日(土)に京都にて開催致します。より多くの御参加を頂くため、幹事一同着々と準備を進めております。本会同窓の皆様方には、今より御予定下さいますようお願い申し上げます。

(高山記)

院生の会

立命館大学大学院電気系専攻院生の会は平成三年四月一日に発足した同窓会組織で、大学院電気工学専攻(全員)の修了者である正会員と現役院生である学生会員及び特別会員から構成されています。

本会の目的は研究室の枠を越えた会員相互の親睦交流であり、毎年総会と学生会員も含めた親睦会を開催しております。

立命電友会との関わりにおいて、本会の主要な役割を「電気工学専攻における研究の現状報告や会員相互が日頃携わっている開発・研究に関する情報交換を通して社会的ネットワークの強化をはかること」と位置付けております。すでに、会員相互の情報、学会発表、研究科行事等をお知らせする「院生の会会報」(年一回発行予定)を本年二月に発行いたしました。

立命電友会の発足や院生数の増加など本会の使命が拡大するなか、立命電友会と共に専攻会員の交流の場となるよう一層の努力をして行く所存であります。

なお本年度の総会は十一月頃を予定しております。

(副会長 亀井且有 記)

事務局だより

立命電友会の設立に合わせて事務局が電気電子工学科内に設置されました。校友相互の親睦や学科と校友皆様方の交流も考えて尽力いたす所存でございます。幸い、長年電気工学科に御勤務いただき、本年三月三十一日をもって御定年を迎えになられました前田稔夫

先生に、週一日の事務局嘱託をお願いすることができました。会報の発行、名簿の編纂、事務局運営、卒業生の所在確認など課題は山積しておりますが、皆様方の御協力を得ながら対処してゆく所存でございます。つきましては、会報への寄稿、同窓会報告(便り)、連絡先変更、もしくは本会への御要望などございましたら、お気軽に事務局まで御連絡いただけますようお願い申し上げます。

また、本会の設立にともないまして、卒業生・校友皆様方には終身会費の御納入をお願いしております。同封の振込用紙にて御納入頂きました方々には、領収書とともに「立命電友会会誌(設立記念号)」を御送付いたします。本誌は、電気工学科沿革、電気電子工学科案内、教員紹介、研究室紹介、同窓会紹介、寄稿集など約一六〇ページの特別号であり、残部数も限られております。御早めに御振込頂きますようお願いいたします。なお、設立総会時に御納入頂きました方々には、御案内重複致しますことお詫び申し上げます。

立命電友会事務局連絡先

〒603—1777

京都市北区等持院北町五六一

立命館大学理工学部電気電子工学科内

電話 〇七五—四六五—八二〇三

FAX 〇七五—四六五—八三三八